

2012 花農家は いま

③カーネーション

南房総市富浦町青木のカーネーション団地。年50万本を生産する「精華園」代表の岩田秀一さん(35)は昨年、4つのハウスに自動灌水・自動換気システムを導入した。農園の一角には気温や湿度を観測する「気象ポータル」が置かれ、測定値を分析して屋根や覆いの開閉が自動制御される。

狙いは、よの厳密な品質管理。「人の手でやるよの温度むらが少ないくなり、花の色や丈夫さに違いが出てくる」という。消毒用の



薬剤散布も含め、自動化できるところは「ほぼやり終えた」。どれもこれも、近年シエアを急速に伸ばしている輸入物に対抗していくためだ。

「欧米では既に、ほぼ100%を輸入物が支配。日本でも今後、さらにシエアを伸ばしてくるのは確実」と危機感を抱く。

「手を打たなければ下がっていく」単価を維持するため、市場に多く出回らない新品種を積極的に手がけている。

高鮮度の花」を出荷していった」。岩田さんは顧客の仲卸や小売店との結びつきを強めるため、ツイッターやブログでこまめに情報発信を続ける。農園のサイトではハウスのライブ映像も公開。個人客向けのネット販売にも対応している。

輸入物が増大 生き残りかけ

輸入カーネーションは、ほとんどが南米コロンビア産。大手の生産会社が「最も適した気候を持つ場所」で栽培するため、「品質はほぼ国産に近づいている」という。15年前には市場の1割だった輸入物は、現在半数以上を占めるまでに

る。定番の品種では色と鮮度で、いかに違いを出せるかが勝負どころだ。

「コロンビア産は切ってから市場に出るまで1週間かかるが、こちらは2日。温度や肥料の管理に加え、土の中の微量元素を調節することで『いい色で

ている」。

◆ ◆

鋸南町下佐久間の富永洋雄さん(70)は、カーネーションを栽培して40年。15年前からJAの共撰部会に参加し、生産する年17、18万本の大半を「JA安房」ブランドで出荷する。



忙しく出荷作業する岩田秀一さん。

「規格を合わせて出荷するのは最初は大変だったが、安定した値段が出るし、事務作業にかかる手間が省け、栽培に専念できるのがいい」。現在はカーネーション部会長として部会員9人の先頭に立つ。

JA安房のカーネーションは、集出荷場で1本ずつ厳しく検品してから箱詰め。出荷容器に「安房の1本選別」と大きく印刷し、品質にはらつきがないことをアピールしている。富永さんは「産地を売り込む時代。市場や仲卸の信用、信頼が第一」と強調する。

鋸南町で一時は80軒あったというカーネーション農家は、現在40軒ほどになった。共撰に参加する生産者も高齢化などで徐々に減少。「スケールメリットを生かすためにも、一緒にやってくれる仲間を増やしたい」。